39. 季節Ⅲ 夏

梅雨も明け、本格的な夏の到来です。これは切り離し高気圧であったオホーツク海高気圧が消滅し、太平洋高気圧が張り出してきたことを意味します。しかしはっきりと区切りがつくわけではないので、梅雨明け宣言のタイミングは難しいものがあり、昨年は見事ハズレでした。

本格的な夏の訪れは太平洋高気圧の張り出しが本格的になることで,その等圧線が横縞模様になり、等圧線の間隔も広がります。そして張り出しの先端が‘鯨の尻尾型’になると猛烈な暑さに見舞われます。在日外国人が悲鳴をあげるのは夏の暑さです。日本より暑い国はいくらでもありますが、湿度が高くて気温も高い不快指数でいえば世界最悪だと複数の外人が言っておりました。またキューバのハバナでのパーティーで知り合ったご婦人は、かって東京に駐在したことがある人で、東京の想い出をいろいろと話しておりましたが、結論は日本は大嫌いとのことでした。その理由は夏の湿度の高さ、冬の寒さ、そして毎日めまぐるしく替わる陽気に身体が変調をきたし、風邪のひきどおし、連日病院通いにうんざりしたとのこと、からっとした常夏のキューバからみたら成程日本は地獄の陽気かもしれません。

しかし‘住めば都’毎日換る季節のうつろいを肌に感ずる歓びがあるのです。中東からやってきたかっての同僚は、雨が降るとコーモリ傘をさして何処までも歩いて行きます。雨の中を歩くのが嬉しくてたまらない至福の一時なのです。まさに‘雨に唄えば’の心境でしょう。そのうち網走へいって‘ガリンコ号’に乗って流氷見学しようと計画中です。

中東その他の人達を対象とした「新緑に萌え、咽ぶ様に降るサミダレの中、陸奥路のツアー」「オホーツク海の流氷群」「青森・秋田の地吹雪ツアー」「墨絵の様な雪景色の中を走る‘五能線’‘只見線’」等立派な観光資源、歓声を上げて悦ぶこと間違いなし、そして雪国の水のおいしさを味わって欲しい、源泉かけ流しの温泉をたっぷりと堪能して欲しい。十年余砂漠の街で水に苦しんだ経験から言って豊富で美味な水は立派な観光資源です。文字通り‘湯水のごとく’使える豊かさ、贅沢・快楽の極致です。

さてこの豊かな水資源をもたらしてくれる最大のモノは台風です。しかし来て欲しくない元凶でもあるのです。夏のテーマとしては矢張り台風と云うことになります。

四面を海に囲まれ、自然の恵みを十二分に満喫している我が国は、反面自然災害の恐怖を併せ持っているわけです。‘天災は忘れた頃にやってくる’といいますが、忘れるどころか前の被害を修復して

いるうちに次の災害がやってくるように日本国中どこかで被害を受けているのが実状でしょう。

「地震・雷・火事・台風」は天災、災害の代表格で、用心、戒めの言葉でしょう。でも一寸変ですね「地震・雷・火事・オヤジ」が通例云われている格言ですが、これはもっと変です。‘オヤジ’とは親父・親爺のつもりでしょうか。大不況でシューンとなっている現今のオヤジさん達が怖い格言の代表だなんてとても言えないことです。では昔のオヤジさん達は怖い存在だったのでしょうか。確かに現在よりは少し怖い存在だったかもしれませんが、天災や災害と同列で論ずべきモノではないでしょう。何かオヤジだけが浮き上がっている感じで、どうもしっくりといきません。それとも単なるシャレの積もりなのでしょうか。どうもシャレとしてもくだらないものです。

角度を変えて‘オヤジ’を解剖してみましょう。古来より日本各地には風、雲の動き、山、太陽その他の見え方、肌の感じ方、五感全てを駆使して天気を予測する‘観天望気’を行ってきました。その土地ならではの伝承・格言等五感を駆使して見事に当たる古来からの観天望気、気象格言、気象を占う現象を表現する言葉が多数あります。

風に係わる言葉は各地に独特の表現があり、現在でも漁師さん達の日常会話の中で使われています。“コチ吹かばにおいおこせよ梅の花　主なきとて春を忘るな”（菅原道真、拾遺和歌集）。コチとは西日本では東風を表現します。ハエは南風、地方によって表現の違いがあり、また同じ表現でも方位に違いがあったりで統一されておりませんが、自然発生ですからやむをえません。

その中で南東の風を‘ヤマジ’と表現している地方があり、更に渦を巻く風の意味を含んでおります。また「風の辞典」によりますとヤマジは強い風を指す、となっております。

天気予報の無い時代、熱帯低気圧と温帯低気圧の区別はありませんから、全て大風、暴風と云う観念だけでしょう。勿論台風の観念はありません。しかし夏の頃猛烈なヤマジが吹き荒れる嵐があることは経験から判っておりました。台風は最初南東の強い風が吹き荒れ、その風は渦を巻くように吹くので、ヤマジが来たと恐怖にかられたでしょう。その中で渦を巻いて猛烈に吹く風、暴風（ヤマジ）に更に‘大’を付けて“オオヤマジ”と表現し、これを略して‘オヤジ’としたら、まさに台風そのものです。

突如襲ってくる台風の恐怖は漁師さんはじめ海事関係者にとっては死活問題ですし、我が国の基幹産業とも云うべき水田耕作において稲の花が咲く頃、実る頃を見測るように突如襲ってくる大暴風雨、農民ばかりではなく住民にとって恐怖そのものだったことでしょう。そうすると「地震・雷・火事・オヤジ（台風）」こそが本来の意義ある格言です。

二百十日、二百二十日という台風襲来の用心を促す言葉がありますが、九月中旬頃を指し台風襲来の可能性が高いことを示しています。

新暦 1 月 1 日から数えると 210 日は 7 月 29 日、220 日は 8 月 6 日頃になり、これは明らかに陰暦で数えたモノで、寅の月の正節で旧暦正月（2 月 4 日頃）から数えるのです。同じように‘夏も近づく八十八夜’も陰暦の数え方です。と云うことは陰暦の時代からこのような格言が存在していたことを意味します。

前回（38 回）で述べたヤマセ、オヤジ等の言葉は気象の影響をもろに被る農民にとって最大の関心事であり、必死になって観天望気を心掛けたのでしょう。

◎　台風の語源

台風という単語が最初からあったわけではありません。大風、野分（草木を吹き分ける強い風）等単に風の強さを表現するだけで、低気圧の状態を区別できる具体的な知識はありませんから、経験として毎年ある時期になると大暴風雨があることは判っており、怖れおののいていたことでしょう。 中国にも南部地方に台風が上陸することがあります。ですから中国語でも暴風を‘大風’、後には颶風と呼んでおりました。この大風（ダイフウ）がシルクロードを経てアラビア商人によってヨーロッパに伝えられ、それが‘Tyhoon’という単語のなったのだという説が有力でした。従って日本語の台風が英語になって Tyhoon になったとする説は明らかに間違いで、Tyhoon の方が先にあったのです。

ところがまた別な見解が出てきました。それはアラビア語で嵐を‘Tufan’と云います。更にギリシャ語で「旋風」を「τμφων」で発音はタイフンに近い読みですからややこしくなりました。

そこで整理してみますと海のシルクロードは 9～10 世紀には開拓されており、イスラム圏の交易船がインド、東南アジアを経由して中国と交易しており、さらにはフィリッピンのモロッカ諸島へにも行っております。宋や元の時代にはイスラム船が頻繁に来航していた記録がありますから、当然強烈な台風の洗礼を受けたであろうことは想像できます。

インド洋の季節風である‘モンスーン’はアラビア語の「Mausim」が語源であることは間違いありません。そうすると Tyhoon の語源もアラビア語の Tufan からヨーロッパに伝わって 16 世紀には Touffon になり、更に進化して Tyhoon になったとする説が矢張り有力です。即ち台風の語源はアラビア語にあり、世界は繋がっていることが良く判ります。

スペイン・ポルトガルが大航海時代の先駆けとなったとする世界史の見解はさておき、歴史上の大航海時代のはるか以前にアラブの人達はインド洋や東南アジアから東シナ海まで自由に航海し、明の時代には第 14 話で述べたように鄭和の大船団は中国を出発してアフリカの喜望峰廻りで大西洋まで進出しております。この事実はコロンブスが新大陸発見と宣言しているより約 80 年も前のことです。しかもコロンブスが乗船していたサンタマリア号とは比べモノにならないくらいの巨船ですから大航海時代はアジアの方が遙かに先行しており、造船術、航海術、航海計器その他全てのモノが優れていたと断言できます。

船の大きさは一寸判りづらいと思いますので、具体的な例を示しましょう。第 14 話で鄭和の船団の宝船をおおよそ 2～3000 トン位としましたが、横浜の桜木町駅の近くミナトミライ地区に展示されている‘帆船日本丸’は 2300 トンですから、あの位の大きさだったと思ってください。一方コロンブスの旗艦サンタマリ

ア号は 109 トンですから、近海操業の中型鰹一本釣漁船やサンマ棒受漁船が 100 トン位です。

後年 バスコダ･ガマがインド航路を発見したと称しておりますが、喜望峰を廻ッてからはアラブ人のパイロットが乗船して先導することによってインド洋を横断、インドに到着、インドとヨーロッパの文化の相違に驚いています。勿論インドの方が数段上なのです。

従って我が国で教えている世界史が如何にヨーロッパ中心の歴史かが判りますし、歴史の教科内容が国、民族によって全く違うことは認識しておくべきです。

台風を意味する英語の Tyhoon が存在しておりましたが、我が国では明治になってから本格的な気象観測が行われるようになり、熱帯性低気圧が発達して大暴風雨になることは判ってきましたが、それを表わす気象用語がありませんでした。そこで第四代中央気象台の台長であった岡田武彦氏が Tyhoon の訳語として台風という文字を当て込ンだのが明治後期のことです。また台湾の方からやってくるということで颱風という字を当てたこともあります。かくしてやっと台風という気象用語が出来上がったのです。

一つの言葉、単語にも曰く因縁があり遠い道のりを経てやって来たのが良く判ります。

パズルを解いていくのも楽しいもので老爺にとってボケ防止には最適かもしれません。